

MAPPS

Newsletter from MAPPS

頑張れ、ミュージアム。

No.22

2024.05



早稲田システム開発株式会社

東京都新宿区高田馬場4-40-17
TEL:03-6457-8585
<http://www.waseda.co.jp/>

CONTENTS

ミュージアムITピック

「作品の裏」で
知的好奇心を刺激

愛知県美術館

ミュージアムIT屋さん現場を征く

学芸員魂をリリックに乗せて
学芸員ラップバトルトーナメント

岡山県立美術館

ミュージアムリサーチャー

大学サークルによる
プロ品質ナレーション

國學院大學博物館
國學院大學放送研究会

ミュージアムITピック

デジタルアーカイブを
「展覧会限定」で使う

神戸市立博物館

コラム

ミュージアムの展示がくれるもの
橋の科学館 訪問記

お知らせ

I.B.MUSEUM SaaS
新インターフェイスが完成しました

ミュージアム
ITピック

「作品の裏」で 知的好奇心を刺激

愛知県美術館

愛知県美術館のコレクション検索。2018年に1,200件を超えるパブリックドメインのコレクション画像を自由に活用できる状態で公開したことで話題になりました。国内の美術館としては画期的な試みでしたが、今年4月には新たな取り組みも。何と約80点もの絵画作品の「裏側の画像」を一挙に公開したというのです。

学芸員の皆様には「釈迦に説法」で恐縮ですが、絵画作品の裏側にはたくさんの情報が隠れており、ときには表とは別の作品が描かれていることも。それを展示する美術館もありますが、館としてインターネット上で積極的に画像を公開するという試みは、なかなか興味深いものがあります。実際、Google Arts & Cultureではフェルメールの『真珠の首飾りの女』の裏側に修復家のラベルや

カタログについての情報、鑑定人や購入者の署名など多数の情報が連なっていることが紹介されていますので、今後はこうした試みが増えていくのかも知れません。

近年は、ポピュラー音楽の世界でも、マニアックなファンのために名盤の収録曲の作曲・録音の過程が分かる音源などをボーナストラックとして追加する手法がすっかり定着しました。名作の裏側を知ることは、作品そのものだけでなくアーティストの研究が一気に深まります。美術界でも同様に、作品だけでなく制作周辺の詳細情報までインターネットで容易に触れることができる環境が整えば、調査研究用途はもちろんディープなファンの裾野を広げる効果を狙えるかも。同様の取り組みが広がることを期待したくなる事例です。



愛知県美術館

ホームページ

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

プレスリリース

https://www-art.aac.pref.aichi.jp/press/pdf/2024backimage_press.pdf

コレクション検索

<http://jmapps.ne.jp/apmoa/>



学芸員魂をリリックに乗せて

岡山県立美術館 学芸員ラップバトルトーナメント
2024年3月2日（土）・3日（日）岡山県立美術館2階ホール

「推し作品」「推し資料」への熱い想いをリリックに込めて、学芸員同士がラップバトルを展開！見た瞬間は意味が分からず、思わず読み返してしまうブツ飛んだ内容のイベント。昨年1月に開催され、各種メディアでも盛んに報道されていたので、ご存じの方も多いと思います。そしてこの3月、めでたく第2回大会が開催されましたので、現地で観戦。2日の日程で行われたトーナメントは200席を超える客席がほぼ埋まり、文字通りの大盛況で幕を閉じました。というわけで、今回は学芸課長・福富幸さんに舞台裏をお聞きました。



「学芸員」と「ラップ」？

最初は、頭の中で2つの単語がうまく結びつかなかった方が大半かと思います。まず聞きたいのはここですね…なぜラップ？福富さんによれば、経緯はこうです。

ある日、県文化連盟の会長に連れられて、ひとりの若者が岡山県立美術館を訪ねてきました。脱サラしてイベント会社を立ち上げるという彼は、後に今回のイベントの企画協力を務めることになる株式会社遊覧座の代表・斗澤将大さん。美術の世界にふれたいという彼は、案内役の学芸員・鈴木恒志さんが専門の仏教美術について熱く語る姿に感銘を受け、岡山市立オリエント美術館や林原美術館などにも足を運ぶことに。いずれも熱のこもった解説に感心した斗澤さんは、やがて「学芸員の知識と情熱」が生む感動をもっと多くの人に知ってもらいたいと思うようになったそうです。

ミュージアムは、特別展が開催されていない時期、とりわけ冬場は集客に悩みがちです。第1回イベントは昨年の1月9日＝成人の日ということで、特別展の開催予定がありませんでした。「何か新しいことを

したい」と考える斗澤さんに、福富さんは「成人の日に若者が来てくれるような企画が欲しい」と相談。斗澤さんはいくつかのアイデアを出し、そのうちのひとつが件のラップバトルでした。館のスタッフでは絶対に思いつかないプランに驚いたものの、「これは面白そうだ」ということで、前代未聞のイベントが動き出したのです。



ファンの後押しで 実現した第2回大会

県立の美術館でここまで「遊んだ」企画を通すには大変な議論があったのだろうと思いきや、意外にすんなり進んだとか。お客さんが来てくれるのかについては完全に未知数ながら、もとより来館者が少ない時期なのでマイナスになることはないだろうとの判断でGOサインが出ましたが、ひとつだけ難航したことがあったそうです。それは、「出場者選び」でした。

ギャラリートークなどで優れた話術を持つ方も多い学芸員。と言っても、ビートに合わせてリリック(歌詞)をライム(韻)して フロウ(歌い回し)を作り出すラップは完全に別物。しかも大勢の観客の前で披露する

のですから、尻込みするのも無理はありません。そこで、企画発案の契機となった「斗澤さんを動かした3名の学芸員」を中心に4名を口説き落とし、第1回の開催に漕ぎ着けました(そのうちのお一人は体調不良で無念の不戦敗)。ちなみに、福富さんご自身もエキシビジョンマッチに出場しておられます。

本当に可能なのか…と思われたイベントは、蓋を開けてみれば入場できない人が出るほどの人気に。テレビやネットメディアでも盛んに取り上げられる大成功を収めました。そして、業界内外からの声に背中を押される形で、第2回大会が実現。岡山県博物館協議会の加盟館にも声をかけたところ、岡山市外の館を含めて6人の「選手」が名乗りを挙げ、前回優勝者との7名によるトーナメントとなりました。



大本命が敗退、 波乱の初日

ここからは、観客席から観た当日の様様をダイジェストで。会場は両日ともほぼ満席でしたが、あとで福富さんに伺うと、1日目は少しだけ余裕があったものの2日目は



正真正銘のチケット完売だったそうです。

1回戦は、行李を背負った総社まちかど郷土館の館長・浅野智英さんと、何やら昔の旅姿で登場の倉敷市立美術館・佐々木千恵さんの対決。ステージにはラップの題材となる推し作品・推し資料のスライドが大写しとなり、バトル開始です。総社は売薬が栄えた町ということで薬売りに扮した浅野さんは、日本全体の売薬の流れを把握

できる館の代表として備中売薬の歴史を紹介。一方の佐々木さんは、倉敷出身の日本画家・池田遙邨の生涯と作品をプッシュ。地下足袋をはいて東海道を旅したというエピソードに倣い、佐々木さんは遙邨さんなりきりコスプレで挑みます。

このイベントでは、本格的なポスターが制作されています。そのセンターでポーズを決め

ているのは企画立案の発端にして次戦の出場者、岡山県立美術館の鈴木恒志さん。その扱いにふさわしくラップはかなり上手で、イベント発案者・斗澤将大さんを魅了した仏教美術への愛が語られました。線の美しさ、作品全体の空気感などがエモーショナルに解説され、観客は身体を揺らしながら美の奥深さを学んでいきます。

対戦者は、岡山市立オリエント美術館の伊藤結華さん。優しく丁寧な口調で、エジプト古代文明の魅力を語ります。ラップとしての練度では鈴木さんの圧勝に見えましたが、勝負は何と伊藤さんが制しました。「仏教美術がそう来るなら、古代エジプトにはこんなものがあるよ」とうまく打ち返した機転の勝利といったところでしょうか。前述の通り、技術勝負ではありませんので、これはこれでアリ。とは言え、優勝候補筆頭の初戦敗退に会場はどよめきます。

1回戦最後のマッチアップは、総社吉備路文化館の豊嶋乃女さんと、笠岡市立竹喬美術館の小松美月さん。イギリス美術への愛を語る豊嶋さんが、小野竹喬の作品をプレゼンする小松さんを破ったのですが、この対戦

には後日談があります。ラップバトルから2週間後、小野竹喬の屏風「波切村」が国の重要文化財に指定されたというニュースが舞い込んだのです。小松さんのラップでは「竹喬さん」が連呼されましたので、この日に会場にいた方ならニュースを目にした瞬間に快哉を叫んだのでは。出場目的であるアピール効果を考えれば、小松さんはまさに「勝者」と言えるかもしれませんね。

万雷の拍手で迎えたフィナーレ

2日目、隣席の方とこんな会話を交わしました。「わたしは県立美術館の鈴木さんを見に来たんですよ、知り合いなので」「え、鈴木さんなら昨日敗退しましたよ」「ウソ！本当に？ 信じられない！」。鈴木さんのラップは、やはり人気なんですね。

でも、落胆する彼女に朗報が。エキシビションの「おかわりマッチ」として、総社まちかど郷土館の浅野館長との対戦が実現したのです。プレッシャーから解放された

鈴木さんのラップは前日以上にキレキレで、会場は一気にヒートアップ。一方、こちらも前日とは打って変わって駅員に扮した浅野さんも大ウケで、今大会イチ盛り上がった対戦となりました。盛り上がりと言えば、この大会はプロのラッパーがMCを担当し、格闘技のリングアナのような入場コールと出場者を引き立てる秀逸なトークで華を添えてくれました。ほかに、本格的な音響や出場者の紹介スライドなど、イベントを支える助っ人たちの活躍も見逃せません。エキシビションは続きます。ドイツで活躍する社会派アーティストの加藤竜さんと、ヴィオラ奏者の島田玲さんの異色の対決では、審査員の情景描写ピアニスト・山地真美さんも含めて「3人でコラボイベントを開催しよう」という話に発展し、客席を沸かせました。そして、前大会でも好評だった、福富さんご自身と吉實孝雄さんによる県立美術館・学芸課長vs総務課長の対戦も。「人も予算もぜんぜん足りない」と

訴える学芸側と、「学芸員は自由でいいですね」とうらやましそうな総務側。軽くディスリ合いながらも仲の良さが垣間見える、楽屋ネタ的一幕でした。

さて、決勝トーナメントでは、いよいよディフェンディングチャンピオン・林原美術館の橋本龍さんが登場。自ら能面を被り、さすがの話術と言うかラップで客席を魅了したのですが、何と総社吉備路文化館の豊嶋さんに敗退してしまいます。その豊嶋さんは、岡山市立オリエント美術館の伊藤さんを下した倉敷市立美術館の佐々木さんとの決勝バトルも制してそのまま優勝、見事2代目チャンピオンの座を獲得。そして最後は出場者が舞台上で大団円、万雷の拍手の中でのグランドフィナーレ。満足げに席を立ち、会場を後にする観客の皆さんから口々に聞こえてきた「楽しかったね」「〇〇さんのラップがよかった」といった会話が、満足度の高さを示していました。



イベント開催の成果は

優勝者には、ご本人と所属館をフィーチャーしたポスターが制作され、自館と岡山県立美術館に1年間掲出されるそうです。これがなかなかのPR効果で、去年は林原美術館の橋本さんを直接訪ねる来館者もいたとか。また、会場ではイベント公式Tシャツも販売されたのですが、出場者の所属館に行くときとタグの角を切り取ってステッカーと交換してもらえるという工夫も。開催して終わりではなく、その後も館に足を運んでもらう動線づくりも盛り込まれているわけです。

そしてもうひとつ、イベントの振り返りとして「学芸員の推しラジ」というポッドキャストの配信も。岡山県立美術館・鈴木さんの気合いの入った準備ぶりや、それとは真逆の総社吉備路文化館・豊嶋さんの「一夜漬けぶり」といった舞台裏の様子のほか、上記の公式Tシャツを着た親子連れが豊嶋さんに会いに来てくれた…というイベント後のエピソードも紹介されていました。

出場者たちは他館の学芸員から「観ましたよ」と声をかけられたり、なぜか岡山県庁内で大受けだったり。「ここまでバラエティに富んだ館があると知らなかった」「今日ラップを聞いたミュージアムに出かけたい」「次の開催はいつですか」という声も聞かれるなど、開催効果はあちこちに波及しているようです。



ファンの裾野の拡大に貢献

客席には両日とも老若男女で年齢層が広く、子ども連れの姿も。美術館への入り口を今までと違う場所に置くという観点では、その反響が証明するように大成功と言えるで

美術館 学芸員
その挿絵
悪魔的。
#学芸員ラップバトルトーナメント
#優勝 #韻グラウンド
総社吉備路文化館
〒719-1123 岡山県総社市上井 1252
TEL 0866-93-2219
観覧料 全席 ¥1,500 (入館は 16:30 まで)
開演日 毎月第1土曜日 17:00 ~ 19:15
入場料 無料
※全席についてはいずれかの場合は異なります
主催：岡山県立美術館 共催：岡山県博物館協議会 企画制作：株式会社遊覧屋、株式会社WOWON 協賛：大紀産業株式会社

優勝した総社吉備路文化館・豊嶋さんのポスター。1年間、同館と会場となった岡山県立美術館に掲出されます。

しょう。今大会を観戦したのべ400名前後の方々、ラップで連呼された「遙邨さん」「竹喬さん」らの作品をスマホで検索したはずです。

出場した学芸員の勇氣にも拍手を贈りたいと思います。カラオケボックスで歌うのとはわけが違う難易度の高さにも関わらず「館のPRになるなら」と立ち上がり、多忙な本業の合間を縫って準備を進めて大勢の観客の前で披露したわけですから、その学芸員魂には本当に頭が下がります。

「作品を見に来てくださるだけでなく、出場した学芸員自身を推してくれるお客さん、学芸員ファンも開拓できたのでは」と満足げな福富さん。次回の開催は未定とのことですが、反響の大きさを見て出場意向を固める学芸員がたくさん名乗り出れば、第3回も現実のものになるかも。これだけ好評なのですから、ぜひ継続開催の定番イベントへと育つことを願わずにはいられません。



学芸員の推しラジ

Spotify



Apple Podcast



YouTube



岡山県立美術館 <https://okayama-kenbi.info/>

学芸員ラップバトル <https://g-rap.jp/>

イベントグッズもイケてます

このイベントでは、オリジナルTシャツも用意されていました。前にはラップを披露する学芸員とコレクションのイラスト、背中側には参加各館のロゴが入っています。前面の右下には、参加館を訪れると左右下の角をカットしてステッカーと交換してもらえるタグが。ステッカーのデザインも手に入れたくなる仕上がりで、ラップの余韻が冷めないうちに各館を回る人も多かったのではないのでしょうか。



参加館の受付で
タグとステッカーを
交換！





大学サークルによるプロ品質ナレーション

國學院大學博物館 & 國學院大學放送研究会

スマホアプリで音声ガイドを提供する博物館が本格的に増えてきました。専用の端末や周辺機器が一切不要で、コンテンツの差し替えが容易なのは大きな魅力ですが、その際、ひとつだけ難題が。それは、ナレーションの収録です。

音声ガイドである以上は、やはり読み手が必要。合成音声やAIが活躍するケースもあるようですが、できれば技術を持つナレーターにお願いしたいものです。とは言え、そのつど費用が発生するのは避けたいところ。ということで最近、地域の高校の放送部に依頼するケースが増えています。

昨年11月に「ポケット学芸員」を導入された國學院大學博物館。ナレーションを聴いてみるとこれがプロフェッショナルな仕上がりなのですが、何と大学のサークルのメンバーによるものだそうです。なるほど、大学博物館ですから、学生とコラボすればよいですね。そんなわけで、今回は國學院大學放送研究会に所属する同学3年の三枝大地さん、西川桃子さん、落合颯祐さん、そして國學院大學博物館の佐々木理良さんにお話を伺いました。



國學院大學 放送研究会とは

今回の取材にあたり「放送研究会」について調べてみましたが、たくさんの大学で設置されているのですね。アナウンス技術を磨いたり番組制作を実際に行ったり、学生が運営する大学内のテレビ局のような役割を担っているようです。

國學院大學放送研究会は、3つの部門から構成されています。まずトーク番組や音声ドラマの制作やイベントの司会などを担当するアナウンス部、ミキサーやカメラなどの放送機材を操作・管理する技術部、そして番組や映像作品などを企画して脚本を作成する企画部。合計で50名ほどが所属する大所帯で、そのまま映像制作会社を興せるのではないと思わせる組織構成です。メンバーには、アナウンサー志望の学生がいれば番組制作者を志す学生もいて、何かを

作るのが好きな若者たちが集まっています。仲間とともにバラエティ番組を作ったり、キャンパスがある渋谷近辺をロケで巡ったりと、充実したサークル活動を展開。そんな中で、今回お話を聞いた三枝さん、西川さん、落合さんの先輩にあたる当時の学生が、大学の学生生活課を通じて博物館にコンタクトしてナレーション制作を申し出たのが2022年のこと。その年の11月に、原稿のやり取りが始まりました。



難解な言葉との格闘

お話を伺ったのは、ポケット学芸員での公開から数か月が経過した2024年4月、上記の発起人的立場の先輩学生が卒業したタイミングでした。学生3人と担当学芸員の佐々木さんを迎えての取材は、

インタビュアーは不要なのではないかと思うほどの大盛り上がり。何でも気さくに話してくれる彼らの会話に驚くやら感心するやら、とても楽しい時間となりました。

収録での苦労話を聞くと、「少し難しい言葉が多かったよね」「私が担当した原稿にも超難しい箇所があって、何度も録り直しました」「あの言葉の発音も大変だったよね」「アクセント辞典にも載ってなくて、困ったよね」…といった具合。それもそのはず、こちらの博物館が扱うのは神道や考古系の資料で、ナレーションの原稿内には聞いたことがないような難解な言葉が当たり前のように頻出するのです。

実際に使用した原稿の一部を拝見したのですが、ルビが振られているにも関わらず書き込みが多数あり、格闘の痕跡がありありと見受けられました。こうした難読語の話題で特に盛り上がったのが、『多度神宮寺伽藍縁起井資財帳』という資料名。

ルビを振ると『たどじんぐうじがらんえんぎ
ならびにしぎいちょう』となるのですが、な
るほど、これは読めません。「井」を「ならび
に」と読むのですが、その直前までを一気
読みするのがコツだとか。

こうした名称は、それが何なのかをある程
度は理解していないと、区切る場所も想
像もつきませんよね。原稿内にはほかにも
練習しないと発音できないような言葉が
大量に溢れています。初歩的なものでは
「伊勢神宮内宮」、これは言葉は分かっ
ても正しいイントネーションを問われる
と少し怯んだりして。「八咫鏡」や「瓦経・礫
石経」あたりに至っては、ルビがあっても
音にする自信がありません。

「ナレーションやりますよ」と申し出てこの
原稿を受け取ったら、恥を忍んで辞退す
るしかないような難易度。しかし、さすがは
若者たちですね。彼らは、逆にここからモ
チベーションに火が点き、ちょっとした冒険
のような挑戦を始めたのです。



プロ顔負けの 本気度とこだわり

収録されたナレーションは「です・ます調」な
のですが、これは卒業した当時の中心メン
バーの提案で「である調」から変更されたも
ののだそうです。理由は、その方がナレー
ターが読みやすいから。確かに、その方が
難読語とのコントラストが鮮明になって聞き
やすいかもしれません。分からない用語は
すべて調べて理解し、次に前記のアクセ
ント辞典で正しいアクセントを調べるので
すが、実に7万語以上が収録されたこの辞典
をもってしても未収録の用語が頻出。そん
な時、頼りになるのが佐々木さんをはじめ
とする学芸員でした。そうです、学芸員は辞
書の上をゆく存在なのです！

学芸員側でも、アクセントのお手本をスマ
ホに録音して音声ファイルを送るなど、進行
上での工夫も。こうして、ひとつの単語も疎
かにせず、学芸員のチェックで少しでも

違和感がある場合はリテイクするという本
気の収録が続きました。何度も繰り返して
疲弊するどころか、やがて学芸員からOK
が出て自分たちが納得できなければ録り
直すレベルに到達。モノづくりの職人の世
界では「神は細部に宿る」という言葉を聞
きますが、その一端を垣間見るような情熱を
もってナレーションは完成しました。

最終的には、1分のナレーションに1時間以
上を費やした計算になるとか。その甲斐
あって仕上がりは素晴らしく、あまりの品質
の高さに驚いた佐々木さんは「これ聞いて
ください、ウチの学生、すごいですよ！」と
オリジナルの音声ファイルを職場内で宣伝
してまわったとか。実際、この取材記事もナ
レーションに感動したことがきっかけです
で、佐々木さんにまったく同感です。





博物館と大学生の 連携事業、 今後に向けて

同学の放送研究会は、アナウンス部に所属する部員がイベントの司会を引き受けるケースを除くと外部との共同作業の機会が少ないため、よい経験になったようです。また博物館側も、学生たちとのコラボを大いに喜んでいる様子。館のホームページには謝意を込めてナレーションを担当した学生たちの名前が掲載されています。もともとそうした方面を志望する学生なら、就職活動の際に大きなアピール材料になりますね。

取材日は休館日だったこともあり、それぞれ自分がナレーションを担当した展示資料の前で記念撮影。学芸員の佐々木さんが少し離席されたところで「面白くていい博物館だね」と水を向けてみたところ、「そうなんですよ！ 専攻が違うので、今回の件がなかったら来る機会はなかったでしょうが、ウチの大学の自慢の施設だと思います！」という元気な返事が。館としては、超が付くような高品質のナレーションとともに、学内にファンも獲得できていたわけですね。

この活動を続けて放送研究会の伝統になれば嬉しいのですが、それは彼ら自身も考えていた様子。ほかの博物館から依頼が来たらどうするかという質問には、「もちろん！」「ぜひとも！」「うお～、激アツ！」とハイテンションなレスポンスが返ってきました。というわけで、プロ並みの解説ナレーションをご所望の場合は、國學院大學放送研究会にオファーを出してみてもいいかがでしょうか。

國學院大學放送研究会のメンバー紹介



今回取材に応じてくださった仲良し3人組。
左から、三枝さん、西川さん、落合さんでした。



國學院大學博物館 <http://museum.kokugakuin.ac.jp/>

國學院大學博物館 音声ガイド紹介ページ
<http://museum.kokugakuin.ac.jp/facilities/>

國學院大學放送研究会 <https://kokugakuinkbs.wixsite.com/kokuhou>

國學院大學放送研究会 X(旧Twitter) https://twitter.com/kbs_kokugakuin

國學院大學放送研究会 Instagram
https://www.instagram.com/kbs_kokugakuin/

ミュージアム
ITトピック

デジタルアーカイブを「展覧会限定」で使う

神戸市立博物館 特別展「Colorful JAPAN―幕末・明治手彩色写真への旅」

皆様ご存じの通り、昨年の博物館法改正でデジタルアーカイブが正式に博物館の業務の一部として位置付けられました。一般にデジタルアーカイブとは、長期保存や一般公開を目的に文書や文化資源の情報をデジタル化することを指します。ところが、神戸市立博物館の特別展「Colorful JAPAN―幕末・明治手彩色写真への旅」と連動するデジタルアーカイブは、何とこの展覧会のみでの限定公開。非常に珍しい取り組みですが、実際に体験してみると「その手があったか!」と目から鱗が落ちるようなナイスアイデアでした。きっと広くご参考としていただける事例ですので、さっそくご紹介いたします。



幕末・明治の 手彩色写真

モノクロの写真に色を付けた手彩色写真。こうした展覧会だけでなく、最近ではインターネットでもよく見かけますね。幕末や明治の活気ある町並みや穏やかな田舎の風景、当時の暮らしが伝わってくる人々の佇まいに心を奪われた方も少なくないのでは。今回の展覧会は、改めて150年前の日本に魅了される鑑賞体験となりました。

手彩色写真は、かつては土産物として、あるいは輸出品として外国人の目に触れることが多かったそうです。時の浪漫をいっそう掻き立てるような独特の質感が特徴ですが、今の私たちの目で見ると、これがまた優れた演出となっているわけですね。



「もっと見たい」 期待に応えて

インターネットでも見ることはできるものの、展覧会の魅力は何と言っても「実物」の持つ引力です。芝増上寺や富士山、京都や

奈良の写真で旅情に浸ったり、侍や籠の写真では歴史小説のワンシーンを思い出したり。また、女性たちの写真は、手彩色で頬を少し赤く染めているため生き生きと見えます。個人的には、神戸の近くで生まれ育った身として、元町の風景には特に惹かれました。行き交う人々で活気に溢れていて、いますぐ出かけてみたいと思うほど魅力的な町に見えます。

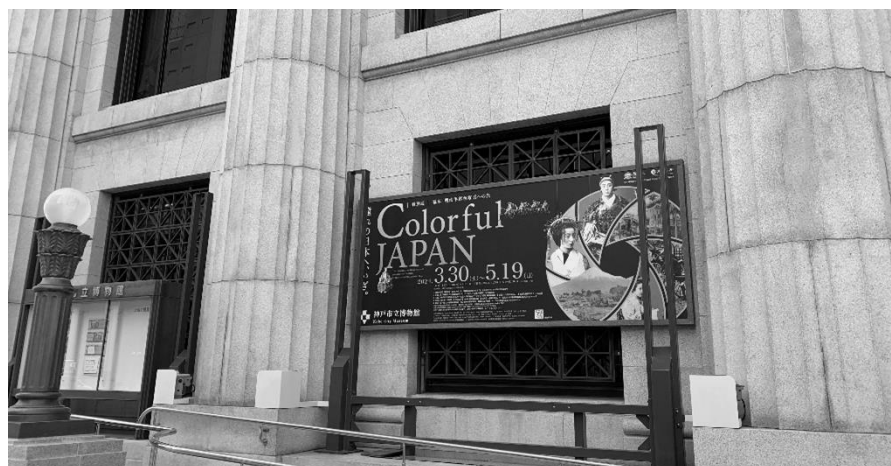
場内には、当時のカメラや絵の具なども展示。また、この時代は立派な蒔絵で彩られた写真アルバムも見どころです。実物も展示されていましたが、写真が貼られたページが開かれた状態で置かれていました

ので、当然「ほかにはどんな写真が見られるのだろう」と気になる場所。そんな「もっと見たい」という期待に応えてくれるのが、今回ご紹介する展覧会限定デジタルアーカイブなのです。



デジタルアーカイブ 仕組み

デジタルアーカイブには、掲出されているQRコードからアクセスできます。実物をたっぷり堪能し、館を出たところでスマートフォンを開いて閲覧してみました。



全部で9点のアルバムからひとつを選んで開くと、中に収録されている写真がズラリ。この一覧画面が実に壮観で、ここから写真を選ぶと上部のメインエリアに置かれます。拡大ボタンで大きな画像を表示でき、ピンチアウトの操作でさらにズームインできますので、見たい部分をじっくり見ることができるのがいいですね。

風景写真の背景、室内の設えや小物、人物写真の表情や着物。気になる部分があれば細部まで確認できるのは、デジタル鑑賞のよいところ。ホテルに着いてからも、展覧会の感動に包まれながらリラックスすることができました。



展覧会のみ限定公開の効果は

この特別展を鑑賞したのは夕方だったのですが、翌日も神戸に留まるスケジュール。そこで、朝一番で改めてお邪魔して、学芸課係長の小林さやかさん、学芸員の水嶋彩乃さんにお時間をお借りすることができました。

展覧会の来場者の方々の反応などをうかがうと、今回の試みの効果がはっきりと出ていました。と言うのも、冊子ものを開いた状態での展示がある展覧会では、決まって「ほかのページも見なかった」という声が多数寄せられるところ、今回の展覧会ではそうした声がほぼ皆無なのだと。つまり、展覧会限定デジタルアーカイブが「もっと見たい」というニーズにしっかり応えている証であるわけですね。

「残す」「継ぐ」役割がクローズアップされがちなデジタルアーカイブですが、うまく活用すれば、単に公開するだけでなく展覧会をサポートして来館者の満足度も高めることができる。これは、多くの館で参考になる事例なのではないでしょうか。今回は写真アルバムのほかのページを見たいというニーズへの対応でしたが、「もっとご覧になりたい方はこちらにどうぞ」という展示スタイルが有効なシーンは、ほかにもきっとあるはずです。

アイデア次第で、まだまだ広がるデジタルアーカイブの可能性。展示の素晴らしさに加えて、実に勉強になる展覧会体験でした。



実際の画面がこちら。ずらりと並ぶ写真はまさに壮観です。



神戸市立博物館
<https://www.kobecitymuseum.jp/>

Colorful JAPAN—幕末・明治手彩色写真への旅
<https://www.kobecitymuseum.jp/exhibition/detail?exhibition=378>



ミュージアムの展示がくれるもの

橋の科学館 訪問記

長さ約4キロにも及ぶ壮大な構造物である明石海峡大橋。私の郷里から車で40分ほどのところにあるのですが、完成したのは上京後ということで、実際に渡ったことはありません。橋の反対側にあたる淡路島は、子どもの頃にフェリーで出かけた日帰り旅行の思い出の場所。今は橋を渡る所要時間はわずか数分なのですから、時代は変わったものです。

というわけで、今回は本州側のたもとにある「橋の科学館」にお邪魔しました。本州四国連絡橋の建設を支えた架橋技術を紹介するミュージアムで、パネル展示や映像資料のほか風洞実験に用いられた大迫力の実物模型も。パネルの解説によれば、橋の完成で物流が大幅に改善して特産品の「淡路島玉ねぎ」の販路が広がったり、徳島県のLED産業の発展の契機になったりしたそうです。最近はりニア中央新幹線が話題ですが、大規模なインフラ整備による経済効果は想像以上なのですね。

巨大な吊り橋を海の上に渡すというプロジェクトは、完成までにおよそ10年もの年月を要しました。「橋」のひとつで済ませてしまうとイメージしにくいですが、支える柱ひとつを取っても、その断面は甲子園球場に匹敵する大きさとのこと。しかも海の上での作業となるわけですから、知識がない私はどうやって成し遂げたのか想像もつかなかったのですが、模型をはじめとする充実の展示の数々でスッキリと納得。まず海水に溶けないコンクリートの開発にまで遡る逸話の数々を知り、関わった方々のお仕事には感動すら覚えました。

困難に立ち向かって成功を収めた人々のエピソードには、いつも心を動かされます。それは記憶にしっかりと書き込まれて、現在の自分の意識や姿勢に少なからず影響を与えてくれるものだと思います。そして、ミュージアムはそうした情報の宝庫。私は仕事柄、訪問先の見学だけでも多数の展示を鑑賞しますので、この20年で博物館からいただいたものの大きさは計り知れません。

1館1館の特徴や個性、印象に残った展示を思い返すと、いくら時間があっても足りません。これまでにいただいた学びや気づきへの感謝を込めて、いつか「元気になるミュージアム」を特集した本を出版してみたいなあ、と思いました。ただ、実現はリタイア後になるかな？ いや、紙の本ではなく、各館のデジタルアーカイブをうまく使ったブログであれば、もっと早いかな？ 館を出て、さまざまなエピソードを知ったことでひとまわり大きく見える橋を見上げつつ、しばし空想に耽るのでした。



橋の科学館

<https://www.hashinokagakukan.jp/>

住所：兵庫県神戸市垂水区東舞子長4-114

アクセス：JR舞子駅、山陽電鉄舞子公園駅下車海側へ歩いて5分



I.B.MUSEUM SaaS 新インターフェイスが完成しました

この4月5日、弊社の公式ホームページにおいてI.B.MUSEUM SaaSのユーザ・インターフェイスのリニューアルを正式に告知いたしました。ここでは、リニューアルの背景やポイントについて、少し詳しくお知らせします。

リニューアルの背景

弊社収蔵品管理システムI.B.MUSEUM シリーズのクラウド版として誕生したI.B.MUSEUM SaaSは、2010年11月にサービスを開始しました。開発を始めたのは2008年で、画面デザインの制作に着手してから今日まで実に15年前後の年月が経過したことになります。当時は、Microsoft Windowsのバージョンで言えばVistaから7に移行した頃で、クラウドの歴史もまだ始まって間もない時期でしたが、その後は多種多様なサービスが誕生し、現在のオフィスでは複数のツールを使いこなして当たり前という時代になりました。

I.B.MUSEUM SaaSはリリース後も改善を続け、多数の追加機能をお届けして参りましたが、インターフェイスは15年前に設計されたものということで、最近のモダンなクラウドサービスと比較すると細かな使い勝手の面で見劣りするようになってきました。それでも、むしろ年を追うごとにユーザ数の増加スピードが上がるような状況となってきた昨今、現代のOSやソフトウェアに慣れた方々に違和感なくお使いいただける環境が必要と考え、時代に合わせた使い

やすいインターフェイスを開発する運びとなりました。

切り替えの手順

新インターフェイスへと刷新したI.B.MUSEUM SaaSは、機能改善・追加を伴う一部の画面を除き、すでにご利用いただける状態にあります。新規でご契約のお客様は新インターフェイスをご利用いただくこととなりますが、すでにご利用中のお客様につきましては、画面のデザインやレイアウトがいきなり大幅に変わると困惑されるケースもありませんかと存じます。館だけでなく地域にとっても大切に継承すべき重要なデータを扱うシステムということで、一般的なソフトウェアのアップデート以上に慎重を期し、より安全にご移行いただける方法を採用することといたしました。

新インターフェイスへのご移行は、2025年3月までに全ユーザの切り替え完了を目指し、お客様ごとに個別に日程を設定いたします。これは、ご移行時期を分散することで、弊社担当が可能な限りのサポートをご提供できる体制を確保することを意図しております。日程は弊社よりご提案いたしますが、ご都合によってご相談いただけます。

加えて、ご移行にあたっては、新インターフェイスの操作を自由にお試しいただけるお客様専用のサンプルシステムをご用意いたします。本格移行に備えて少なくとも1か月以上の試用期間を設け、現在ご運用中

の本データに影響を及ぼさない形で操作に慣れていただくためのもので、ご要望次第ではこのタイミングでの操作説明も実施可能です。

サンプル環境は、現在お使いのデータを一時的にコピーしてご利用いただく方法と、館のデータベースとは関係ないサンプルデータをご利用いただく方法の二通りからお選びいただけます。前者は業務で見慣れたデータを新インターフェイスに移すと操作がどう変わるのかをリアルに体感いただけますが、本データとは同期しておりませんので、日常業務で混同してサンプルのデータの方を更新しないようご注意ください必要があります。後者では、そうしたリスクを排除できますが、業務に関係ないデータですのややリアルリティに欠けます。このあたりは、館のご事情に応じて環境をお選びください。

なお、試している時間が取れないといった理由でサンプル環境がご不要の場合は、すぐに新インターフェイスへと切り替えることもできます。その場合でも、一定期間は旧（現行）インターフェイスのデータベースにログインできる環境をご用意いたしますので、操作に困ったら以前の画面を確認しながら慣れていただくことができます。



編 集 後 記

ラップバトルの記事で紹介したポッドキャスト「学芸員の推しラジ」で、総社吉備路文学館の豊嶋さんが「17～19世紀のイタリアなどの風景画は、グランドツアーで訪れたイギリスの若者が買って帰った」と話されていました。グランドツアーとは、当時のイギリスの裕福な貴族の子弟が学業を終える時に行った国外旅行のこと。我が子が持ち帰ったイタリアの風景画を見る家族の表情は、旅先で撮ったスマホの写真を見せてもらう私たちと同じなのでしょうね。

神戸市立博物館の展覧会で見た手彩色写真が、日本を訪れた外国人の土産として人気だったという話も、いわゆる「東洋の神秘」

への関心の高さが背景にありそう。広重や北斎の「旅もの」も、当時の人々の見知らぬ土地への憧れがあったのでしょ。そう言えば、1980年代以降は海外旅行が身近になった一方で、世界各地のあまり知られていない場所を紹介する番組が定番になりましたね。個人的にも、吉田初三郎の鳥瞰図を見て当時のその土地の様子を想像したり、川瀬巴水らの浮世絵作品で大正期や昭和初期の日本の風景に没入したりするのが好きだったりします。

こう考えると、人々の憧れや好奇心に応えることもミュージアムの役割なんだなあ、と改めて実感します。ミュージアム・システムやデジタルアーカイブも、それを支える力のひとつ。弊社も、まだまだやるべきことがありそうです。